

第4支会

1 地域の概況

第4支会の区域である梅郷地域は、市の西部に位置し、秩父多摩甲斐国立公園の玄関口にあたる。

梅郷地域は畑中、和田町、梅郷、柚木町の各地区から成立っており、市を西から東へ貫流する多摩川の右岸段丘に開かれた東西に細長い地形である。

多摩川を隔てて沢井・二俣尾・日向和田と向かい合い、梅郷地域の東は駒木町に、西は御岳に隣接している。

面積は約11.87平方キロメートルで人口は11,067人、世帯数は4,252世帯（平成22年1月1日現在）で、市全体の人口が減少する中であって、人口増加傾向の地域である。

御岳山から東にのびる尾根は愛宕尾根と呼ばれ、日の出山、高峰、愛宕山、三室山、梅ヶ谷峠、馬引沢峠、二ツ塚峠へと続き、峰を隔て、あきる野市・日の出町と接している。三室山からの尾根路を東に進むと梅ヶ谷峠の鞍部に出る。ここは、断層のため尾根が落ち込み、日の出町、あきる野市方面と、日向和田、青梅方面を結ぶ交通路になっている。

また、梅郷地域一帯は「吉野梅郷」と呼ばれ、青梅市梅の公園をはじめ地元農家の各梅園などが点在し、老木、若木合わせて約2万5千本の梅が彩る「梅の里」である。梅こそ観光青梅の代表樹木であり、なかでも吉野梅林はその名を全国に知られている。

この梅林について、昭和8年東京府緑地計画いほう彙報には次のとおり記載されている。

「名称・吉野梅林（吉野村上分及中分一帯）府標識名称（大正8年10月指定）樹齡千歳ヲ寿グガ如ク、老梅訪フ人々ヲ迎フルガ如シ。数千ノ巨木姿態百様清楚ニシテ、詩情溢ルルバカリ、花時清香浮動シテ其樹ノ大ナル蓋シ関東第一ト称セラル。梅林中周囲三尺以上ノ巨木二千余。」

また、作家山本有三の小説「真実一路」にも、戦前であるが吉野梅林が描かれている。平成21年2月には、新聞の「何でもランキング」で全国の梅の名所第1位に選ばれた。

吉野梅林の代表スポット「青梅市梅の公園」は昭和47年3月に開園、その後、公園地を拡張して、現在約4.5ヘクタールの広さで、120種、1,500本の梅が植栽されている。



梅の公園

梅郷地域に関連する多摩川に架かる橋としては、万年橋（畑中地区）、和田橋（和田町地区）、神代橋（梅郷地区）、奥多摩橋・軍畑大橋いくさばた（柚木町地区）がある。その他、好文橋もある。

万年橋は架橋当初木橋であったが、明治40年に鋼製アーチ橋となり、平成17年の架替え整備により現在のものになった。

神代橋は旧神代万年橋のやや下流に昭和19年につり橋型の神代橋として架けられ、昭和44年に現在の神代橋となった。

和田橋は昭和40年に架けられた橋で、パイプアーチの橋としては青梅で最も古い橋である。

また、奥多摩橋は「戦前の道路用鋼アーチ橋として最大のスパンを誇る」などとして、2009年度の土木学会推奨土木遺産に認定された。

なお、「おうめ おらっと ふらっと ミニマップ」の中で、これらの橋などを歩くコースが紹介されている。

教育施設は市立第五小学校、市立西中学校（旧市立第四中学校と旧市立第五中学校を昭和48年に統合したもの）があり、幼稚園が1園、保育園が3園ある。

産業としては、梅（生梅・梅干・苗木・盆栽）

と自然を生かした観光である。

神社は、畑中神社、下山八幡神社、愛宕神社など各地区にあり、仏閣は即清寺、大聖院、地藏院などがある。

2 地域の歴史

(1) 町村の変遷

梅郷地域は、古くは吉野村と呼ばれ、柚木、下、日影和田、畑中の四つに分かれていた。

現在の梅郷（1丁目～6丁目）は、かつては下村（しもむら）と称し、寛文年間（1668年）に「下村はすこぶる大村につき」上・中・下の三郷に分けられたといわれている。この上郷、中郷、下郷という呼び名は公の村名（後の大字名）ではないが、三郷にはそれぞれ名主も置かれていた。

明治22年4月、市制町村制の施行により、下村は畑中村、日影和田村、柚木村と併合し、吉野村大字下となった。吉野村は、もともと梅の林と青梅草と名付けられた福寿草の栽培で有名だったが、明治17年に川上郡三（初代村長）の提唱により、桜の名所の大和（奈良）の吉野山にちなんで、下村の三室山の中腹一帯に数千本の桜の木を植え、新吉野の再現を図ろうとした。それが村名を「吉野」とした理由である。しかし、その後数千本の桜の木は杉・檜の植林のために伐られ、結局、吉野村は桜の名所にはならなかった。

昭和30年4月、吉野村は他の三村（三田村、小曾木村、成木村）とともに青梅市に合併した。昭和42年6月、青梅市最初の町字区域合理化事業によって、町字は次のとおり整備された。

新町名	旧字名	新町名	旧字名
はたなか 畑中1丁目 ～3丁目	はたけなか 畑中	梅郷1丁目 ～6丁目	しも 下
和田町1丁目 ～2丁目	日影和田	柚木町1丁目 ～3丁目	柚木

なお、「梅郷」という地名は住民要望や合併当時の出張所の名称が梅郷であったことなどによる、といわれている。

畑中はかつて「畠中」、「畑ヶ中」とも記され

たといわれ、日影和田は日向和田と一体の地域を指す地名とも伝えられている。

また、柚木は古くは山間北面の地で、積雪が多いことから「雪村」（隣接地梅郷は「霜村」と言ったといわれる説のほか、馬具に使う「由木」を産することから、それが村名になったと言う説もあるが、柚子（ゆず）の樹の生育に適した地であり、寛文8年の検地帳には「武蔵國多麻郡三田領柚木村」と表題があることから「柚木」という文字が定着したといわれている。

(2) 歴史の一こま

明治10年に、内務省勸農局により柚木に開設された根岸養鱒場は、我が国養鱒業の発祥の地である。

また、地域の文化人として、大衆小説文学の巨匠「吉川英治」の名はあまりに有名である。昭和8年、『宮本武蔵』で大衆小説文壇の第一人者としての地位を確保した。

昭和19年、戦火を避け柚木に家を求めて来住し、草思堂と名付け居住した。以来梅郷の静かな環境を愛し、大作『新平家物語』の執筆にあたり、地域の住民とも交流を持ち、東京都下初の公民館である吉野村公民館の建設に当たっては積極的に協力した。昭和35年文化勲章を授けられ、昭和37年70歳で没し、青梅市名誉市民の称を贈られた。

昭和52年3月、生前居住していた草思堂の西側敷地内に新たに吉川英治記念館を建設・開館した。

そのほか、梅郷地区に陶芸家の人間国宝、故「藤本能道」の自宅工房もある。

また、昭和20年の太平洋戦争終戦直前に起きた柚木町地区の米軍機墜落事故などがある。

さらに、この地域の有名な民話として和田町の「ズンズク大尽」や柚木町の「百いらず」などがある。

3 支会（自治会）活動

(1) 構成

第4支会は梅郷地域の住民による14の自治会組織の連合体であり、各自治会はその町名ご

と等にまとまった6つの連合自治会を構成している。

支会は、支会長、副支会長、会計、会計監事、理事で運営され、各自治会は会長と副会長の他諸役員により運営されている。

自治会数は昭和30年度（合併時）6自治会であったが、平成8年度に現在の14自治会となった。自治会加入世帯は2,918世帯で加入率は68.92パーセントである（平成21年4月1日現在）。

(2) 活動

支会として具体的には、平成10年度から開始した大型車交通量調査がある。これは砕石輸送の貨車からトラック輸送への切替え計画等に伴うものである。平成9年8月、本計画の撤回等を要請する要望書を市に提出したが、計画は実施された。

調査は、吉野街道、青梅街道の両街道について、当該車両の1日間（午前7時から午後7時まで）の上り車線交通量を調べるものである。調査の後には、関係事業者などと協議会を設け、地区の児童・生徒などの安全確保を図った。なお、この調査は現在も継続している。

このほか梅郷地域の活性化のために策定された「梅の里交流促進計画」（平成17年3月）に基づき、ロウバイの植栽を青梅市梅の公園や梅郷5丁目・6丁目の多摩川沿いなどに行ったほか、花粉症対策や日照確保のため、針葉樹の伐採も行った。

また、地域の安全確保対策に呼应し、平成18年9月、各地域の協力を得て、安全で住みよい地域の実現を目指す組織「第4支会地域の安全

をまもる会」を立ち上げた。

これらの活動のほか、支会役員が実行委員の一員として文化祭を実施したり、地区防災対策委員会が主体となって毎年実施される防災訓練、多摩川1万人の清掃大会などの環境美化運動や地区の慰霊祭の協力・実施や青少年対策梅郷地区委員会など、地域の諸団体の事業にも協力した。

社会福祉事業の市社会福祉協議会会費、赤い羽根、緑の羽根、歳末助け合いの募金活動への協力のほか青梅防火協会、青梅防犯協会などの会費収納事務にも協力、実施した。

さらに、市の回覧物の回覧や地上デジタル放送の周知と未視聴地域の対策、土砂災害警戒区域指定の住民説明、住宅用火災警報器の斡旋・配付（平成19年度から3年間で1千個以上）など行政にも協力した。

なお、事務局は梅郷市民センター（出張所併設）であるが、平成20年度から市の管轄が社会教育部から市民部に変更となった。

また、平成20年度に梅郷地区において、プラムポックスウィルス（PPV）による梅の病気の発生が確認され、梅の里である当支会では、地域住民の理解と協力を得るための広報活動に努めるとともに、行政対応に協力した。この病気の撲滅と梅の里のイメージ回復に向けた対応が今後の大きな課題となった。

4 各種団体と事業

(1) 体育振興会

梅郷地区体育振興会は、梅郷地区市民の体力づくりを積極的に推進し、地域社会体育の振興発展を図ることを目的として、活動している。

会長、副会長は支会の支会長、副支会長があたり、市委嘱の体育指導委員と各自治会の体育部長・各種団体長などにより運営されている。

昭和49年には社会体育の普及、振興に寄与したことにより東京都教育委員会から、また昭和50年には文部大臣からの表彰を受けた。このようなことから、梅郷地区における体育活動は先進的で非常に盛んである。



自治会長会議

最も大きい事業は毎年10月に実施する梅郷地区市民大運動会である。体育振興法のモデル事業として、昭和45年度を第1回とし毎年実施しており、節目となる第40回(平成21年度)には、記念事業として、和太鼓の演奏や抽選会を実施した。

このほか、年間の計画に基づきソフトボール大会、インディアカ大会、ビーチボール大会、ファミリーゴルフ大会、卓球大会を行っている。



第4支回運動会

(2) 青少年対策地区委員会

平成20年6月の改正社会教育法により学校・家庭・地域の連携・協力を進めることが、青少年の社会教育を推進する上で重要であると明確に位置づけられた。

青少年対策梅郷地区委員会事業としては、青少年の健全育成を考える機会として座談会や講演会を、社会環境の浄化活動事業として、第4支会地域の安全をまもる会の中で通学路の点検や防犯パトロールなどの非行防止活動を実施した。

また、ジュニアキャンプ、親子ふれあい綱引き大会などの主催事業や球技大会、柔道・剣道寒稽古等の健全育成活動事業や多摩川1万人の清掃大会を後援し、参加・協力して自治会ぐるみ・地域ぐるみの取り組みを行った。

(3) 地区防災対策委員会

梅郷地区防災対策委員会は、自治会長や消防団員などで構成し、講演会や普通救命講習会(AED操作講習会)をはじめ梅郷地区全体の防災訓練を実施している。平成22年度からは、災害時要援護者支援対策事業にも取り組む。

なお、平成20年9月、防災意識・対策の普及・充実に対し青梅消防署から感謝状を受けた。

(4) 地域の安全をまもる会

第4支会地域の安全をまもる会は、平成18年9月発足し、同年10月から活動している。この会は、第4支会(各連合自治会)を中心に、小・中学校、保育園・幼稚園、青少年対策地区委員会、地区ふれあい連絡協議会などの長で本部を構成し、地区ごとに結成されたパトロール隊が毎日パトロール活動をしている。発足時には、活動のための傷害保険料がネックとなったが市の市民活動災害補償制度の制定により解消した。

活動の実績は、次表のとおりである。

区 分	延活動日(日)	延活動人員(人)
平成18年度(半年間)	1,061	4,415
平成19年度	2,103	8,810
平成20年度	2,049	8,754

なお、平成19年6月、警視庁生活安全部長・東京防犯協会連合会長から「地域安全運動功労(団体)」を受賞した。

(5) 老壮学園

梅郷老壮学園は、他地域とは異なり「～大学」とせず「学園」と称し、地域内の高齢者を対象とした団体(組織)である。

事業としては防犯・防災活動や市民体育促進活動、環境美化活動、市民文化活動などがある。これらの諸行事への参加を促進し、学習、趣味、文化、交流、環境など幅広い分野への参画により心を豊かにする楽しい生活と地域社会づくりに努めている。

(6) その他

第4婦人会は平成13年度をもって解散したが、青梅市消防団第4分団、交通安全協会第4支部、梅郷地区高齢者クラブ連合会、戦没者遺族会第4支部、梅郷地区慰霊塔奉賛会、まとい会梅郷支部、青梅女性防火防災の会第4支部などがあり、活動している。